

なかのゆき  
中野 幸さん (25歳)  
営農地:久留米市田主丸町  
主な農産物:ブドウ・イチゴ・  
イチジク・ブルーベリー



## 家族・お客さん・田主丸が好き過ぎ!

● 就農のきっかけ

### 両親の背中を見て

ご両親は、久留米市田主丸で果樹の観光農園をされており、幸さんが中学3年の時、お母さんが自家製果樹を使ったフルーツパイの店「樹蘭」を開店。元々、お菓子や料理が大好きだった幸さんは、お客さんの多い夏休みなどは、毎日のように店を手伝っていたそうです。

高校も調理師免許が取得できる食物調理科に進んだ幸さん。卒業後の進路を考えた時、自然と母の店を継ぎたいと考えてようになっていました。一方で、手伝いでなく経営者としてお客さんに接したことがなかったので、その不安を払拭するためにカフェ経営の専門学校で2年間経営のノウハウを学びました。

● 私の今～就農後の道のり～

### “自分の家の強み”を生かす

専門学校で色々なスタイルの店を研究する中、最初は都会に沢山あるお洒落なデザート店に憧れた時期もあったそうですが、同じことをしていたのでは決して勝てない。差別化が必要だということを知りました。

そこで改めて母がやってきたフルーツパイの店「樹蘭」の強みを考えてみると、耳納山麓の雄大な自然や隣接する観光果樹園といった地域資源がある中、当時、一般的でなかった6次産業化にいち早く取り組んでいることが、どれほど個性的なものかを改めて実感しました。

「そんな状況で、卒業と同時に母から店の経営を任せられたため、最初は凄いプレッシャーでした。店の経営はうまくいって当たり前、売り上げが落ちたら、それは自分の力量不足になるので、もう当初は、経営を維持するだけで精一杯でした。」と就農当初の苦労を語る幸さん。

2人の兄が就農して、農園の作業負担が少なくなったことで、ようやく落ち着いて経営ができるようになり、その頃から単にパイを売るのではなく、そこに使われているフルーツを自分達がどんな自然環境や思いで作っているかを伝えることができるようになったそうです。

● これからの夢、目標

### 地域のものをもっともっと使っていきたい

「久留米市田主丸町は果樹栽培が盛んな地域にあるので、これからは自分の家にある果樹だけでなく、地域の生産者と連携して珍しい果物や野菜まで含めたところで商品の種類を充実させていきたいです。今はパイだけですが、ジェラートやスムージーなんかもやれたら仕事の幅も広がりますね。そのためには、まだまだ勉強することが沢山ありますが、今はそれが楽しみでもあります。自分がステップアップすることで、この地域の良さもPRできたら最高ですね。」と幸さんはこれからの夢を語ってくれました。



プロフィール

■ 家族構成 / 本人、父、母、兄2人 ■ 営農年数 / 約4年  
■ 耕作(経営)面積 / 1.2ha ■ 販路 / 直売・観光

### 就農を考えている女性へ ♡

農業＝農作業を思われがちですが、今は農業の6次産業化が注目を集めています。

自分の作ったものを、自分の言葉で伝えて販売する。そしてお客さんから直接の反応が返ってくるなんて、この仕事でしか味わえない楽しみだと思います。自分もまだ就農して日が浅いですが、これから農業を始められる女性には、こうしたことにも興味を持ってもらえると嬉しいです。

筑後北部エリア